

立命館大学大学院
2022年度実施 入学試験
博士課程前期課程

文学研究科

人文学専攻・文化動態学専修

入試方式	実施月	コース	専門科目 ※英語による問題を含むことがある	
			ページ	備考
一般入学試験	9月	高度専門	×	
	2月		P.5～	
社会人入学試験	9月	高度専門		
	2月			
外国人留学試験	9月	高度専門	P.1～	
	2月		×	
学内進学入学試験	9月	高度専門		
学内進学入学試験 (大学院進学プログラム履修生対象)	2月	高度専門		
APU特別受入入学試験	9月	高度専門		

【表紙の見方】

×・・・入学試験の実施がなかった等の理由で入学試験問題の作成がなかったもの、または、問題を公開しないもの
斜線・・・学科試験(筆記試験)を実施しないもの

※試験終了後、ホッチキスで綴じること(太線の4箇所)

2023年度 立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2022年9月10日

博士課程前期課程 人文学専攻
文化動態学専修

「専門科目」

全 3 ページ

●受験上の注意

- ① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
(ホッチキスを貸与します)
- ② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

- ① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない



文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学専攻 (文化動態学専修)	前期課程	専門科目	☐ 研究一貫 ☒ 高度専門		

以下にその全文を再録するのは、イギリス人作家E・M・フォースターによる「私の森——財産と人間の性格」(初出＝1926年)というエッセイである。これを読んで、次頁以降の問いに答えなさい。

二年ほど前に、インドでのイギリス人の苦勞にも多少ふれた本『小説『インドへの道』』を書いた。自分たちはインドで苦勞をする恐れはないと思っているアメリカ人たちが、この本をさかんに読んでくれた。彼らが読めば読むほど「機嫌になつてくれただおかげで、著者の私には多額の印税がまいこんだ。私はその印税で森をひとつ買った。たいした森ではない。ろくに木も生えていないし、いまいまいしいことに真ん中を誰でも歩ける道が通っている。それでもこれは私が手にした初めての財産だから、読者にも私とともに恥をしのんで、不安の念には相違があつても、ひとつ大事な問題を自分の胸に訊いてもらつてもいいだろう。つまり、財産が人格におよぼす影響は何か？」ということである。経済学的な問題は考えないでほしい。私有財産が社会全体の財産におよぼす影響というのは、また別問題である。これはもつと重要な問題かもしれないが、とにかく別。心理的な問題にかぎることにする。何か物を持ったばあい、人間にはどんな影響があるか。私の持った森は、私にどんな影響をあたえるだろうか。

まず第一に、自分の体が重くなつた気がする。財産に、この効果があることはまちがいない。財産は人間を重くするが、天国へ入りそこなつたのは体の重い人間だつた。あの男、つまり聖書の寓話『「マタイ伝」一九・三十四ほか』に出てくるあの不運な百万長者は、べつに悪人だつたわけではない。ただ、太つていたのだ。背中のはうはもちろん腹まで出つぽつていたものだから天国の門であちこちがつかえてしまい、でっぷりした横腹を痣「あざ」だらけにしながらふと下の方を見ると、ほつそりしたラクダが針の穴を通つて神の織物に織りこまれていくところが見えたのだつた。四大福音書ではかならず、太つていれば動きが鈍いということになつてゐる。そんなことは明々白々なのだが、あまり理解されていない。つまり、物をたくさん持つていれば動きがとれず、家具にははたきを掛けなければならず、はたきを掛けるには使用人が必要で、使用人がいれば保険料を負担しなければならず、こういう面倒なことを考えていると、食事の招待に応じるのも、ヨルダン河まで洗札を受けに行くのも、億劫になつてしまふのである。ときによると聖書はさらに一步をすすめて、トルストイと同じく、財産を持つのは罪だとまで言う。こゝまでくるとそろそろ困つた禁欲主義の世界であつて、そこまではついていけない。だが、財産が人間にあたえる直接の影響となれば、その因果関係ははつきりしている。人間を重くするのだ。重い人間はとうぜん、神の御子イエスのように電光石火、東西を走る『「マタイ伝」二四・二七』わけにはいかず、したがつて体重九〇キロ近い主教が説教壇に上がつていく姿は、イエスが天から降つてこられるお姿とはまさに正反對なのである。森のおかげで、私は自分が重くなつた気がする。

第二は、もつと大きな森がほしいという思いをかきたてられ

ることだ。

このあいだ、わが森の小枝が折れる音が聞こえた。私はまず腹が立つた。誰かがブラックベリーを摘もうとして下生えの木々を荒らしているのではないかと思つたのだ。ところが近くへ行つてみて、人間が枝を踏んで折つたのではなく鳥だと分かると、嬉しくなつた。この鳥だつて、私のものではないか。しかし、鳥のほうでは、かならずしも喜んでくれなかつた。身内だということも考えずに、私の顔を見るなり怯えて飛びたつと二氣に境界の生け垣をこえ、これはヘネシー夫人の財産である野原に舞い降りて、一声高く鳴いたのである。許しがたい気がした。森がもつと広ければ、こうはならなかつたはずなのだ。私にはヘネシー夫人の財産まで買上げる余裕はなかつたし、夫人を殺すこともできないわけで、四方八方こういう制約だらけなのだ。アハブは、あのブドウ畑がほしかつたわけではない『旧約聖書「列王紀上」二二』。ただ自分の所有地をきれいな形にして、すつきりまとめたかつたのである。ところが困つたことに、こんどはその境界線をまた守備しなくてはならなくなる。その外側がうるさくて仕方がないからだ。子供たちが石を投げるので。かくてじりじりと、ついには海に至るのである。カヌート王『デンマーク・ノルウェーの王だつたが、イギリスに侵入して一〇二六年には全イギリスの王となつた』は幸せだつた。アレクサンダー大王はさらに幸せだつた。そもそも、全世界を所有しても、そこで終りにしなければならぬ義理などありはしない。近い将来には、イギリス国旗を搭載したロケットも月に向けて発射されるだろうという。火星。天狼星。さらにその先まで：だが、こういう広大な世界を考えていると、さいごには悲しくなつてきた。まさか、わが森が全世界を支配する出発点になるとは思えないではないか。それにはあまりにも小さく、ブラックベリーはさておき、鉱物資源などありはしないのだ。ヘネシー夫人の土地に舞い降りた鳥がふたたび驚いて飛びあがり、自分は何者にも束縛されないとばかり、われわれのどちらとも無関係なところへ飛んで行つてしまつても、私の心は慰められなかつた。

第三に、財産を持つと、所有者は漫然と放つてはおけなくなつた。ところが、何をすればいいのか分らない。何となく落ちつかない、自分を表現したいような漠然たる気持ちに襲われるのだ。これはあきらかに、芸術家を創作に駆り立てるのと同じ気持ちである。まだ生えている木を切り倒したくなるかと思えば、むしろ空いている場所にもつと木を植えようかと思つたりする。どつちも格好だけの、中身の無い衝動なのだ。金をもうけたいとか美しくしたいという、正直な心の動きとはちがう。その源は、自分を表現したいという愚かしい欲望、手にしたものを楽しめない不満なのである。創造、財産、享受、この三つは、人間の心に宿る芳しからぬ三位一体である。創造と享受はどちらも結構きわまりないのだが、これを達成するには往々

にして物質的基盤が不可欠で、そうなると代わりに財産がしやしやりでてきて「私じゃどうです。充分三分の値打ちはありませんよ」とのたまう。ところが、充分ではない。それは、肉欲についてのシェイクスピアの言葉のとおり、「むざむざ恥ずかしい行為に精神を浪費する」だけのことであり、「前には楽しみでも、すんだ後は夢にすぎない」『「ソネット」二九番』のである。それでも、これからは逃れようがない。飢餓を避けるための経済的な機構が、これを強制するからだ。また魂にも欠陥があつて、財産こそ自己開発を、優れた英雄的行為を、可能にするのではないかとこの気持ちも、これを強制するからである。地上での生は物質的、肉体的なものだし、またそうであるほかはない。だがわれわれは、この物質主義と肉体性を正しく管理する術を、まだ身につけていないのだ。これはどちらもいまだに所有欲とややくしくからみあつていて、(ダンテの言葉を借りれば)「所有と喪失は一体」なのである。

こゝまでくれば、第四のさいごの問題になる。ブラックベリーの話だ。

この貧弱な森のブラックベリーの量などたかが知れているけれども、中を通つてゐる道からはよく見えて、かんたんに採れるのだ。ジギタリスも同じで、これも引つこ抜かれるし、教育熱心な女性が月曜に学校で見せようと思つて毒キノコを掘り返したりもする。それほど教育的でない女性たちは、友人の紳士の腕に抱かれてワラビを押しつぶす。紙も散らかるし、空き缶も転がる。これでも、果たしてこの森は私のものと言えるだろうか。私のものだつれば、誰も通さないのがいざばんではなからうか。南イングランドの保養地、ドーセットシャのライム・リージスの近くにも、やはり運わるく真ん中を公道が通つてゐる森があるのだが、その所有者はこの点でためらうことはなかつた。道の両側に高い石の塀を建てて、何箇所かに橋を渡したのだ。その結果、人びとは白蟻のように迂回させられる羽目になつたが、彼自身は誰に見られることもなくブラックベリーを食つてゐる。まさに自分の森を所有しているわけで、みごとに話というほかはない。黄泉「よみ」の国へ行つた金持ち、なかなかがんばつた。しかし、彼とラザロをへだててゐる淵は目では渡れても『ルカ伝』一六、この世では、その淵を渡してくれるものはない。私もいづれは同じことになるのだらう。心ゆくまで財産を楽しもうとして、塀と柵で囲むにちがいない。でっぷり太つて、かぎりなく強欲になり、創造のまねごとをして、利己心の塊になり、この四つの悪徳の冠を頭にかぶつた果てに、やがてやつてきた意地のわるいロシアの共產主義者たちにけつきよくそれを奪われて、この世の外の暗黒の世界に放り出されるのだらう。

※ 邦訳書の訳者が付した割注およびルビは、それぞれ「()」で本文中に組み込んだ。他方、()で括られた文字列は著者自身によるものである。

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学専攻 (文化動態学専修)	前期課程	専門科目	☐ 研究一貫 ☒ 高度専門		

問1 問題文の第1段落にはイギリス、インド、アメリカ、最終段落にはロシア、の国名が読まれる。「空間」的にはこの4つの国を少なくとも含み、かつ「時間」的には問題文初出の1926年を終盤の「点」として含む、おおよそ1900－1930年の「世界史」について、概説的に知ることを記しなさい。

問2 問題文の第1段落で著者は、「財産が人格におよぼす影響は何か？」の問いを立てるものの、ある切り口からの考察は「別問題」であるとして避ける旨を述べる。「作家」の立場からの、是認されるべき見識（取捨選択）だが、あなた自身はここで著者に同調するのではなく、その避けられた切り口——「私有財産が社会全体の財産におよぼす影響」という——をめぐって、人文・社会系の教養の視点で知ること、また考えること、を記しなさい。

問3 上の問2で触れた「財産が人格におよぼす影響は何か？」の問いをめぐる考察は、第2段落以降で、いかにも「作家」的な観察と筆致で展開される。その考察を、核心的主張だけでなく、溢れる諧謔味（ユーモア）も少しく汲みとる努力を払うかたちで、要約しなさい。

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学専攻 (文化動態学専修)	前期課程	専門科目	☐ 研究一貫 ☒ 高度専門		

問4 問題文から、あなた自身のこれまでの研究——あるいはこれからの研究計画——へと関連づける論点を抽出し、小論文形式で自由に(ただしこの3枚目の紙面に収まる量で)論述しなさい。なお、先頭行には、その論述内容にふさわしい論題(副題なしで1行とする)を記すこと。

論題：

[illegible]

※試験終了後、ホッチキスで綴じること(太線の4箇所)

2023年度 立命館大学大学院文学研究科入学試験問題

2023年2月11日

博士課程前期課程 人文学専攻
文化動態学専修

「専門科目」

全 4 ページ

●受験上の注意

- ① 試験中、冊子をばらしても構わないが、終了後再び綴じて提出すること
(ホッチキスを貸与します)
- ② 全ての用紙に受験番号、氏名等を記入し、提出すること

●試験中の持込許可物件について

- ① 筆記用具、受験票、時計以外の持込は認めない



文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学専攻 （ 文化動態学専修 ）	前期課程	専門科目	☐ 研究一貫 ☒ 高度専門		

問1 以下の文章を読んで、設問に答えなさい。

1945 年に広島が原子爆弾によって爆破されたとき、荒廃しきった土地に発生した最初の生命はマツタケだったそうである。

原子を掌握することは、人類が自然を管理するという究極の夢であった。同時にそれは、その夢が崩れていく端緒ともなった。広島に投下された原爆が事態を一転させた。意図的であろうとなかろうと、突然、わたしたちは、人類が地球を破壊し、生活できないものへと転換しうることに気づかされてしまった。公害や大量絶滅、気候変動について知れば知るほど、こうした気づきは強まる一方であった。今日の不安定な状況の半分は、地球の運命に由来している。人間が引きおこす攪乱のうち、いかなるものであれば、わたしたちは我慢して受容することができるのか？ 巷ではさかんに持続可能性が議論されているにもかかわらず、人間をふくめた多種の子孫たちが生きていける環境を残せる見込みは、どれほどあるというのだろうか？

広島は原爆は、不安定な様、もう一方の扉をも開けてしまった。戦後におこなわれた開発の驚くべき矛盾を曝けだしたのである。

戦後、米国の軍事力に支えられた近代化という約束は、輝いているように見えた。だれもが利益を享受できるはずであった。進むべき未来の方向はわかっていた。しかし、それは現在でもそうなのか？ 一方で、世界中のどこであろうとも、もはや戦後の開発の仕組みが作りあげたグローバルな政治経済の影響をうけない無傷な場所など、もはや存在していない。他方では、開発という約束がいまだ魅了しているとはいえ、わたしたちは、その手段を失ってしまったかのようである。共産主義者も資本主義者も、近代化によって世界は仕事で満たされるはずだと考えたものだ。しかも、仕事なら何でもよいというのではなく、安定した賃金と手当が保証された「標準的な雇用」である。しかし、現在、そのような仕事はきわめて稀である。ほとんどの人びとは不規則な生計に依存している。われわれの時代の皮肉は、みな資本主義にどっぷりと浸かっているにもかかわらず、かつて「正規職」と呼んだものにほとんどだれもがありついていないことにある。

不安定であることを受容して生きていくには、そのような目にあわせる人びとをのしるだけでは十分ではない（そうした行為も有意義であろうし、そのこと自体にわたしは異議を唱えるつもりはない）。あたりを見渡してみれば、このあらたな不思議な世界に気づくはずだ。想像力を働かせさえすれば、その輪郭をとらえることはできる。いまこそ、マツタケの出番である。荒れ果てた土地を好んで生きるマツタケが、瓦解への探検をいざなってくれる。そうした瓦解は、すでにわたしたちみな暮らし環境なのである。

マツタケは野生のキノコで、人間が攪乱した森林に発生する。ネズミやアライグマ、ゴキブリのように、ある程度であれば、人間がほどこした攪乱に対しても耐えることができる。しかもマツタケは有害ではない。それどころか、少なくとも日本では貴重なグルメ食材である。日本で珍重されるため、マツタケは世界でもっとも高価なキノコとなっている。マツタケは樹木を養う能力を有しており、そのためにやっかいな場所でも森林が育つのを手助けすることができる。マツタケに着目すれば、攪乱された環境下で共存する可能性について思考することができる。だからといって、さらに環境に負荷をかけうることを擁護しようというのではない。マツタケは、ひとつの共生のあり方を提示してくれる。

マツタケは、グローバルな政治経済に空いた隙間をも照らしてくれる。過去 30 年ものあいだ、マツタケは北半球の森林で渉猟され、新鮮な状態で日本へ輸送されてきたグローバルな商材である。多くのマツタケ狩りたちは、強制的に退去させられたり、公民権を剥奪されたりした文化的少数派の人びとである。たとえば、太平洋に面した米国北西部でマツタケを狩って暮らす人のほとんどは、ラオスとカンボジアからの難民である。どこで採取されようとも、マツタケが渉猟者たちの生計をしっかりと支え、かれらの文化復興さえも担っているのは、高価ゆえのことである。

設問1 下線を引いた「戦後におこなわれた開発の驚くべき矛盾」とは、どのような事態を指しているのか。簡潔に要約して述べなさい。

設問2 この文は、マツタケのもつ多面的な有用性を示している。それらを箇条書きの形式で要約して述べなさい。

〔罫線が引かれた問1への解答用紙は3頁目にあります〕

文学研究科入学試験答案用紙

専攻・専修名	課程	科目	コース	受験番号	氏 名
人文学専攻 （ 文化動態学専修 ）	前期課程	専門科目	☐ 研究一貫 ☒ 高度専門		

問2 以下の文章を読んで、設問に答えなさい。

たまたま今年は英文科や国際言語文化センターの人たちと共同研究をして、アイデアを出し合うことになった。英語教育を専攻する米国の若い研究者が加わったために、議論はさらににぎやかになった。

このアメリカの研究者は、見事な日本語使いである。彼があるタイプの日本人の思考の例を出し、私がそれを「つぎ穂の乱舞ですネ」といった時、彼は一瞬にこれを了解した。私はボールがスポッと相手のミットに収まる爽快な感覚を覚えた。

*

話は、日本語の論文構成になった。最小限千二百字、段落が四つ、起承転結、これが日本語の短い論文の基本である。八百字では随筆にはなっても論理構成には不足だ――。こういう常識を披露したところ、問題は「起承転結」に集中した。

日本のどの予備校でも、大学入試の小論文構成は「起承転結」で行けと教えているはずである。私も、いうまでもない自明のことと思ってきた。

ところが「違う」と若き米国人は語った。「そういう書き方をするから日本人の論文がアメリカの雑誌掲載を却下されることが多いのですネ」。「転」では、それまでの論旨を自ら破って、別の観点からはこうなる、こういう考えもありうるということを述べる。私たちは、それによって、自分が自己主張ばかりをする浅はかな人間でないことと、異見や反論を先取りする視野の広さとを示し、両者の総合として「結」に至る。謙虚さを示しつつ防衛線を張っているわけだ。それがいけないという。

起承転結を英語に直すとどうなるかと問うた。「訳せない」が答えであった。「起」は「スターティング・ポイント」、「承」は「ディヴェロップメント」。しかし「転」と曲がらず、そのまま「ディヴェロップメント、ディヴェロップメント」と進んで「結」の「コンクルージョン」となる。

*

私がこれほど驚いたことは久しくない。「異論の余地や別の観点からの立論は？」「それは別の論文に書くべきでしょう。同じ論文に書き込むことは、論旨の弱さ、論者の優柔不断とみなされます」。

考えてみれば、起承転結は、元来、中国の詩作の作法である。それも、本家の中国では「山高ければ海深し」式の対思考が目立つけれども、「奇」「破」を好む日本文化は「転」がえらく気に入ってしまったようだ。

では、米国式の直線的思考の起源は？「まさか古代ギリシャまでは遡らないでしょうね」「それは分からないけれど、一九〇〇年には米国の教育法はこれで統一されていたと思います」。米西戦争に勝って米国が列強として登場したころである。

若い米国人は語った。「日本語を聴くのに不自由はないけれど、日本語で自己主張をするのは難しい」。私は思った、私の下手な英語でも英語のほうが自己主張は楽だな、と。

*

このことを知っていたのは一座で一人だけだった。これはと思う英文学者で外国滞在歴に事欠かない人に聞いてまわっても知らないという答えばかりだった。若い米国人は「それは常識です。皆知っていると思います」といつていた。文化の違いの深層とはこういうものだ。

私は「結」さえ避け、「結びにかえて」「あとがきにかえて」と余情を残すのを好む日本の著者たちを思った。英語を第二公用語にしたぐらいでは済まない、奥の深い問題である。一九〇〇年以後の日米関係で、この無知のために相互にどれだけの食い違いが起こっただろうか。やがて私たちの論理展開も起承“承”結になるのだろうか。そうならなくて、起承転結は根強く残るのだろうか。

中井 久夫『清陰星雨』みすず書房、2002年、pp. 235-238

設問 この文章をふまえて自分の研究計画を再考したとき、あなたの修士論文の構成はどのようなものになるでしょうか。その理由を明確に示した上で、想定された論文構成を述べなさい。

〔罫線が引かれた問2への解答用紙は4頁目にあります〕